星のカービィ　それぞれのプロローグ

@ABC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のカービィ　それぞれのプロローグ

【Ｎコード】

Ｎ０８２５Ｚ

【作者名】

@ＡＢＣ

【あらすじ】

動き出す闇。彼らはそれに気付いた。ドロッチェ団、メタナイト、そしてカービィ達は、それぞれ戦いの中へ身を投じていく。

ドロッチェ団が呼ばれる（前書き）

原作を知っている人向けに書いているのでキャラの容姿の説明はオリジナル以外省きます。ご了承ください。

最初はドロッチェ団です。

ドロッチェ団が呼ばれる

「団長～！お手紙ですよ～！」
「ん？」
ドロッチェが顔を上げるとスピンが手紙を持ってこちらに走ってきているところであった。
「デデデからですけど…何なんですかね」
首を傾げるスピンにドロッチェはやや呆れながら答えた。
「なんか頼みがあるとからしいが……良いのか？国王が盗賊に頼みごとなんかして」
「普通にアジトに手紙が着くワシらもどうかと思うがの」
口を挟んできたのは自称天才科学者ドクである。
実力は十分なのに自称としか思われないのは後で説明するとしよう。
「いんだよ。平和な証拠だ」
呆れた口調は戻さずにドロッチェが返す。
「それよりなんて書いてあるんですか？」
そわそわしながらスピンが尋ねた。本当は早く知りたくて仕方ないだろうに団長宛の手紙を勝手に読むのは気が引けるのか、覗き込むような事はしない。
ちなみにもう一人の主要メンバーであるストロンはいつも通り、近くにいるが口を開く事は無い。
「話があるからすぐに来い、とだけある。察するに火急の件なんだろうが、ちょっと雑すぎる気がしないか？だんだん右上がりになってるし、字と字の幅もバラバラだし」
「確かに、二人はどう思う？」
ストロンは無言で首を縦に振る。これはスピンに賛成している、という意味だ。
「仮にも基本的にバカみたいに平和とは言え形だけは国王の位を持

ってるとかいう噂なんだからよ、もうちっと」
「団長、火急だと察しているなら早く行った方がいいのでは…」
ぐだぐだと続けるドロッチェに割り込むのは大抵ドクの役目である。
ドクが機械ウンチクを語り始めた場合は立場が逆になる。
「しゃーねー、行くか。めぼしいもんも無いし…チューリン達は留守番な」
「「イエス団長！」」
チューリン達の見送りを受けながらドロッチェ、スピン、ストロンは出発した。そしてもう一人は……
「よし！待っておれ！すぐに移動用マシンブーストウィリーを準備する！このマシンは従来の…」
ドクが説明を始めた時には三人はアジトの外であった。

ドロッチェ団が動く

「遅い…」
デデデの呟きはドロッチェ団へ向けたものだった。出した手紙は時間的に届いたばかりだろうから、来ている方がおかしいのだが事情を知っていたら彼が焦る気持ちも理解できるだろう。
「まだ手紙が届いたばかりだと思いますよ？来てないのが当たり前なのでは」
期待も予想もしていなかった返答にデデデはいらついた。まるで自分の心を読んだくせにあえて質問したかのようなタイミングである。
いくら質問したワドルドゥが有能な科学者でもそんな事出来るはずないだろうが。
そして近くにいるもう一人の発言は火に油を注ぐことになる。
「そうですよ、彼等が遅いのでなく国王の気が短いのです。」
敬語で、しかしその内容は情け容赦ないものだ。
言ったのは不敬隊長の異名を持つワドルディである。
しかし、彼自身自覚は全くない。以前デデデがもっと礼儀を学べと言った時、ワドルディはこう答えた。
「やろうと思えば貴方を殺して新たな王になることも出来るのにそれをしないのは立派な礼儀だと思いますけど」
と、さらりといってのけた。しばらく固まってい反論するのを忘れてしまったのを覚えている。その後も色々おかしいとは思ったが言い返す気にはなれなかった。
が、今回は言い返してやろうと思った。
この状況では仕方ないだろう、などと本音を言っても面白くもなんともないしストレス発散にもならない。この礼儀知らずに何と言ってやろうか。
そう考え始めた所で今度はカチャン、と音がした。

さらに不機嫌さを増したデデデが音の方向に目を向けると、噂をすれば何とやら。ドロッチェ団が鍵が閉まっていたはずの窓から入ってくるではないか。
「おいデデデ。用ってなんだよ。手紙にはろくに書いてねえしよ」
何事も無かったかのようにドロッチェは口を開く。というかピッキング程度彼らには朝飯前で当たり前なのかもしれないが。
一気に気が抜けたデデデは侵入者たちに座るよう勧めた。
「普通に入ってきてくださいよ。えーようがあったなんてしりませんでしたーとばかりに殺っちゃいますよ？」
「やれるもんならやってみな。代わりにお前等皆一文無しになるけどな」
笑いながら冗談を言い合うワドルディとドロッチェ。この二人ならやりかねないと傍観者達はよく知る方を見ながら思ったので笑っているのは本人達だけである。
「で、用って何なんだ？」
しばらく笑っていたドロッチェは表情を引き締めて、改めて問い直した。
場の空気が一変し、視線がデデデに集中した。
「お前達に集めてもらいたい物がある」
「あ、集めて？」
スピンが驚くのも無理はない。盗賊である彼らは国王に頼みごとをされる立場ではないのだ。
「集めてもらいたい物が何かは後で聞こう。それより何で俺たちに頼むんだ？他にも頼める奴はいるだろう？」
当然の疑問である。数多の場所の数多の危機を救ったカービィや、彼と同等の実力を持つ仮面の騎士、メタナイトもいるのだ。ちなみにドロッチェも同じレベルの実力を持っている。
デデデはしばらく沈黙した後口を開いた。
「両方とも連絡が取れん。メタナイトは修行の旅に出たとメタナイツが言っていたが…カービィの方はさっぱりだ」

「はあ！？それこそ一大事だろ！」
ドロッチェは声を荒げた。
「それなら先に二人を探した方がいいんじゃないの？」
スピンも早口で問いかけた。ストロンも口は閉じたままだか同じ心境だろう。
「あの二人が簡単にやられるはずがないです。もしそうだったら毎度カービィにあっさりやられてる王がまともに戦えるはずがありません」
「……ワドルディ、席を外せ」
怒気をはらんだ声でデデデは静かに自分を馬鹿にした部下に命じた。
「いいんですか？護衛が出てっても。襲われても知りませんよー」
「こいつ等はお前よりよほど頼りになる。さっさと出て行け」
「へーいへい」
ワドルディは心底つまらなそうに立ち上がり、部屋を出て行った。
一方デデデはうつむいたまま微動だにしない。呼吸の音が聞こえるだけだ。
ワドルドゥがしばしお待ちを、と言ってからだいぶ経ちようやく顔を上げる。
「すまんな、あいつがいると緊張感が薄れるんだ」
十回以上たっぷり深呼吸をしてようやく落ち着いたのか、デデデはドロッチェ団に頭を下げた。
「いいからもう本題を進めてくれ。なんかどんどん先延ばしになってる」
「それもそうだな。ワドルドゥ、あれを出せ」
「はい」
ワドルドゥが手元に置いてあった鞄から小さな黒い塊を取り出した。
「これ…は？」
スピンが息をのむ。恐る恐る手を伸ばしたが、ドロッチェがそれ

を阻んだ。
「だ、団長？」
「…おい、これは何だ」
さしものドロッチェも僅かに緊張しているのが見て取れた。
目の前に置かれた黒い石。それが自然の物ではないのにドロッチェは気付いた。
「闇の秘宝。ワシらはそう呼んでいる」
「闇の…秘宝？」
ドロッチェは黒い石を見つめる。闇の、と言われてみれば、微弱だが邪悪な力が宿っているのがトリプルスターの使い手である彼には何とか感じ取れた。
逆に言えば、相反する聖なる力を持った武器の所有者でも簡単にはわからないほど弱い力。
「これを集めてほしい。訳は今から説明する。ワドルドゥがな」
「人任せかよ」
デデデはそのつっこみを黙殺し、ドロッチェもそれ以上は何も言わない。
「簡単に言うと弱いとは言え闇の力を持っているのだから集めて壊してしまおうという事です。まあ破壊の方法は見つかっていませんけど」
「いや、ホントに簡単だね」
「でもどうやって探すんだ？こんな力しか放ってないなら俺が見つけるより聞き込みした方が速そうだが」
「私達もその方法は実践しました。しかし効果はほとんど無し、それは何故か？…持っていた人の大半が嘘付いていたんですよ」
「嘘？なんでまた」
「はい、その理由は判明しました。闇の秘宝は人を魅せる力を持っているのです。魅せられた者は、欲望のままに行動するようになる」
「なるほど、闇の秘宝を手放したくないという欲のままに…か」
「そうです。けど、これ以上大きな行動を起こしてこれの元凶に気

付かれたら…」
「お前達では歯が立たない、と」
「……残念ながら」
「その点俺達は盗賊だからな。闇の秘宝の特性と合わせればそればっか狙っても何ら不思議ではない。トリプルスターは使うだけなら誰でも出来るから闇の力への耐性も比較的低いし、万一の時にも対応できる可能性も高い。だから俺たちに白羽の矢が立ったわけか」
「はあ、なるほど」
ドロッチェの隣でスピンが目を丸くする。そして……
「そうか！」
「その発想は無かった」
説明していたワドルドゥと、させていたデデデも納得顔だ。
「…気づいて無かったのかよ」

闇の秘宝の所有者の情報はデデデ達が集める事になった。
ドロッチェ団への報酬は団長がきっぱりと断った。
「俺達は金が欲しくて宝を盗むんじゃない。宝が欲しいから盗むんだ。金が欲しけりゃ金を盗む。貰い物なんかいらねえよ」
と言う事らしい。
そしてその日は解散となった。

一人足りないとは誰も気づかずに…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0825z/

星のカービィ　それぞれのプロローグ

2011年12月8日02時03分発行